

氏 名 田 畑 洋 子
 学位(専攻分野) 博 士 (教育学)
 学位記番号 論教博第86号
 学位授与の日付 平成11年7月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 母子関係修復過程に関する実践的研究
 ——祖母元型マトリックス・モデル——

論文調査委員 (主査) 教授 岡田康伸 教授 山中康裕 教授 藤原勝紀

論文内容の要旨

本論文は、著者がかかわった母親や子供の事例212例(表1)の臨床経験にもとづいて、母子関係をテーマとした3章から成る論文である。各章の要約は次の通りである。

表1 担当事例一覧(1976～1997)

	子　　ど　　も				親		親　　子	計
	子　　ど　　も　　の　　み		並　　　　　　行		親　　の　　み	並　　　　　　行		
	遊　　戯　　療　　法	カウ　ン　セ　リ　ン　グ	遊　　戯　　療　　法	カウ　ン　セ　リ　ン　グ	カウ　ン　セ　リ　ン　グ			
幼児期						30 事例1, 2, 3	1	31
学童期			9 事例4, 5		2	43 事例6	2	56
思春期		7		5 事例7	21	17	10	60
青年期		27 事例8, 9			5 事例10	1		33
成人期		30				2		32
計	0	64	9	5	28	93	13	212

第一章は、「文献展望と本研究の位置づけ」と題される。母子関係の研究は、さまざまな視点から、数多くなされてきているが、母子関係の修復に関するものは少ない。著者の心理治療経験に基づくことでもあり、母子関係の修復にテーマをしぼったこと、従って、目的は1.各年代ごとのクライアントの母子関係修復過程の特徴を考察し、2.母子関係修復のための援助モデルを提示することであることを明らかにする。また、ここで著者がとる立場を明確にする。文献によって、上記テーマの日本の現状を明らかにし、それらを踏まえて、心理学の研究法のひとつである事例研究法をとることを主張する。上記テーマは、母子関係の現状を明らかにするというよりもその変化が問題になるため、その「時間性」と「関係性」と「全体性」を内包している事例法が妥当であるという。

第2章は、「実践例から見る母子関係の修復過程」と題され、3節より成っている。第1節では幼児期の3事例が、第2節では学童期の3事例が、第3節では青年期の4事例が示されている。それぞれの節の終りにその時期での特徴が考察されている。

第3章は、「総合的考察」と題され、3節より成っている。第1節では、外的関係と内的関係や母子関係の発達課題や祖母元型の視点から、母子関係修復過程にみられる各年代の特徴が述べられている。たとえば、幼児期の場合は、外的な関係の改善、すなわち、母親の行動レベルの改善がそのまま母子関係の改善につながりやすいという。もちろん、この場合も母親の内的な安定が必要であり、ここに祖母の働きがみられるという。

青年期では、外的な母子関係の改善は困難なことが多く、そこに重点をおくのではなく、子どもの母親イメージの変化に期待すべきだという。子どもが心理療法を受けることで、セラピストとの関係の中で、母親イメージに変化がおり、それが内的な母子関係を変化させていく。さらに、これが現実の母親との関係をも変化させる。この間、母親自身も自分の人生

の課題（思秋期）に直面し、これをのり越えることが求められる。この時、母の母（祖母）は年老いており、母と祖母の立場は逆転し、母は祖母を世話しなければならない。この時、祖母は、世話を受けるが祖母の役割は、言動よりも「being（在ること）」により母子を支えていると主張した。

事例 1.3.5. 8 の祖母の役割から、「祖母元型」の大切さを主張する。他の文献では、祖母について言及しているのは、わずか伊藤だけで皆無に等しいという。むしろ、「老賢者」について述べられている例はあるという。老賢者というより、祖母をここでは考察する理由としてひとつには現実的具体的レベルでの子ども（母親）や孫（子ども）への関わりである。2 つ目には、渦中にある母子から適度な距離を保ちながら、母子に関わっていくことができるという利点をあげる。さらに、個としての祖母を超えた元型としての“老人の力”がそこにあることを考察し、「祖母元型」が大切であるという。祖母－母－子の連鎖の中で、相互性をもって、それぞれが発達課題の達成がなされていったという。さらに、Lowinsky N. R. の考えに従い、祖母－母－孫娘の生物学的なつながりを母の系列とし、その大切さを主張し、祖母元型「子どもを大地に結びつける力」となるという。

第 2 節では、母子関係の修復の援助技法を 1. 母親へのアプローチと 2. 子どもへのアプローチとして、心理療法の大切さとその技法の特徴を述べる。たとえば、セラピストとの“安全な関係”の経験を基礎として、他者に心が開いていくことができるのであり、それは、子どもへの養育態度に反映されるという。視点をかえるなら、セラピストの役割は、人と人々を繋ぐことであり、クライアント（母親や子ども）の心の層を繋ぐことであるという。

論文審査の結果の要旨

本論文は、著者が卒業論文より、「母子関係の在り方」と「子どもの人格形成や適応」に関心をもち続けてきたのを母子関係の修復に焦点づけて、集大成したものである。著者は自験例 212 例のうち、10 事例を選び、事例研究法にもとづいて、母子関係の修復の特徴をライフサイクル的に（年代を軸として）とらえ、母子関係修復の援助モデルを提示することを目的とした。以下に審査の要約を示す。

自験例 212 例もの多い中から、10 事例を選定した理由が明らかにされた。それは、母子関係に焦点づける時、自験例の中でも母子関係が変化し、ストーリーが認められるのは、そう多くないこと、また、ライフサイクル的にみただけのためという。もっとも、本論文は青年期で終っておりもっと中年期・老年期までも含めないとライフサイクルとはならない。後半部分がないのは残念であるとの指摘があった。

13 の学会誌の文献レビューで母子関係の修復に関する文献は 45 個しかないと明らかにされ、そのレビューがなされている。それは労作であると評価されたが、少々批判的な文献検索が欠けていること、欧文がないのはどうか、などの指摘もあった。しかし、母子関係の修復過程として、母子関係回復のための方法へと取り組んだ研究は、実際的である、と評価された。

心理学の研究方法について、議論があった。自然科学的な方法を数量的なものと決めつけ一面的に否定しすぎているきらいがある。因果律にもとづくことのよさをも踏まえ、さらに、実験者を含めるためや、時間性、関係性などにより事例法をとったとすべきであろうと指摘された。また、著者の立場が問われた。著者は実践場面では、ロジャーズの来談者中心療法であり、予測やクライアントの話の意味などに関しては、精神分析的（ユングとフロイドとの折衷）方法をとっており、それ程明確なものではない。しかし 10 事例は著者独特のものをかもし出しているといえるだろうと評価された。それ程 10 事例は、興味深く、それぞれの心理治療過程はわかりやすい。しかし、少々飛躍的しすぎているところもあり、いまいち緻密に記述されることが求められた。

母親の問題と子どもの問題に加えて、母子関係である以上母子関係上での課題をエリクソンにならって、それぞれの年代での発達課題として、提示したことは、オリジナリティがあると評価された。しかし、まだ、十分にこなれておらず、今後に期待された。たとえば、「祖母元型」は、青年期の母・祖母関係の課題として示されているが、この元型は、その位置にとどまらず、全体を支えているものでもある。「祖付元型」の複雑な役割そのものが、スキット、分類されることを困難にしているであろう。

本論文のオリジナリティは、伊藤や Lowinsky の考えにヒントを得ているが、「祖母元型」に言及した点である。「祖母元型」は、役割の間接性や適度の距離、普遍的価値への導きなどの利点が母子関係の修復に役立つことが示された。この「祖

母元型」はセラピストの態度としても、要求されるものであろうと論をすすめたことも評価された。しかし、父視（父性）との関係や「祖父元型」との関係など、男性軸がまだ考察されていないのは、今後の課題であろう。さらに、「老賢者」について、少し言及されているが、「祖母元型」との関係はどのようなものであろうと検討された。「老賢者」は両性具有であり、中性的といわれている。しかし、実際は男性的というイメージがつかまとう。「老賢者」に対して、「祖母元型」を対比されるようなチャレンジ的な態度があれば、本論文は、もっと生きたであろうという指摘もあった。また、「老賢者」に対してはグッゲンビュール＝グレイグなどが「老愚者イメージ」の概念を主張しているという。これとの関係はいかなるものかと問われたりした。さらに、ユング派の Meir が転移・逆転移の論文で普遍的無意識をも含めて、セラピストとクライアントとの関係を述べている中で、Objective Psyche（2人の当事者をこえた第3の心）が生じてくると主張している。「祖母元型」も、この Objective Psyche に相当するものではないだろうかと指摘された。「祖母元型」が Th. と Cl. との関係とセラピーの進展に重要な役割を演じるともいえようと議論された。212 例という経験の重みと母子関係修復のために「祖母元型」を見出したことなどが博士論文として高く評価されると認めた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成 11 年 6 月 23 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。